



DIEP flapにおける腹部ドナー部ドレーン留置方法の検討

2019年5月1日から2024年12月31日までに日本医科大学付属病院形成外科・再建外科・美容外科にて、自家組織乳房再建術後に深下腹壁動脈穿通枝皮弁術を受けられた患者さん

研究協力をお願い

当科では「DIEP flapにおける腹部ドナー部ドレーン留置方法の検討」という研究を倫理委員会の承認並びに院長の許可のもと、倫理指針及び法令を遵守して行います。この研究は、2019年5月1日から2024年12月31日までに日本医科大学付属病院形成外科・再建外科・美容外科にて自家組織乳房再建術後に深下腹壁動脈穿通枝皮弁術を受けられた患者さんのドレーン留置本数と廃液量や留置日数などを統計解析し、必要なドレーンの留置本数を調査する研究で、研究目的や研究方法は以下の通りです。直接のご同意はいただかずに、この掲示によるお知らせをもって実施いたします。皆様方におかれましては研究の主旨をご理解いただき、本研究へのご協力を賜りますようお願い申し上げます。この研究へのご参加を希望されない場合、途中からご参加取りやめを希望される場合、また、研究資料の閲覧・開示、個人情報の取り扱い、その他研究に関するご質問は下記の問い合わせ先へご連絡下さい。

(1) 研究の概要について

研究課題名：DIEP flapにおける腹部ドナー部ドレーン留置方法の検討

研究期間：研究実施許可日～2027年1月31日

研究責任者：日本医科大学付属病院 形成外科・再建外科・美容外科 助教・医員 青木宏信

(2) 研究の意義、目的について

自家組織乳房再建において深下腹壁動脈穿通枝皮弁術（Deep inferior epigastric artery perforator flap：DIEP flap）は標準的で施行することが多い手術です。通常、手術時に陰圧ドレーンを留置する必要があり、滲出液の排出、ドレーン内容物の定量化と性状の確認、死腔の除去などを期待して行います。陰圧ドレーンの使用は、リハビリテーションや日常生活への復帰を遅らせる可能性があります。本研究は、陰圧ドレーン留置本数について1本群と2本群で排液量や留置日数、有害事象（血腫形成・漿液腫形成）について比較・評価することにより、ドレーンの留置本数を減少させることによる影響を調査し、必要なドレーン留置本数を明らかにすることを目的といたします。本研究によりドレーン留置本数を減少させることが可能であれば、入院期間の短縮や術後の日常生活への復帰を迅速に進めることができるようになると考えています。

(3) 研究の方法について（研究に用いる試料・情報の種類）

この研究は、患者さんの以下の試料・情報を用いて行われます。

試料：なし

情報：年齢、性別、体重、身長、ドレーン留置本数、ドレーン留置期間、ドレーン廃液量等

記述統計量を用いてドレーン1本群と2本群を群別に集計します。比較し、統計解析を行います。

(4) 個人情報保護について

研究にあたっては、個人を直接特定できる情報は使用いたしません。また、研究発表時にも個人情報は使用いたしません。その他、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針（文部科学省・厚生労働省・経済産業省）」および「同・倫理指針ガイダンス」に則り、個人情報の保護に努めます。

(5) 研究成果の公表について

この研究成果は学会発表、学術雑誌などで公表いたします。

(6) 問い合わせ等の連絡先

日本医科大学付属病院 形成外科・再建外科・美容外科 助教・医員 青木宏信

〒113-8603 東京都文京区千駄木 1-1-5

電話番号：03-3822-2131（代表） 内線：25683

メールアドレス：hiro-hockey@nms.ac.jp